

麴屋町の飴屋の幽霊井戸と柳泉の井戸祭

長崎史談会 監事 泉屋郁夫

昔、長崎の麴屋町に一軒の飴屋がありました。亥の刻のころ、トン、トン、トン…と表の戸をたたく音がします。飴屋の主人が戸をすこし開けて見ると、白い着物を着た、青白い顔の若い女の人がたっていました。「飴を一文銭分ください。」とかぼそい声で言い、一文銭を置いていきました。翌日も同じ時刻に現れ、次の夜も、また次の夜も、女の人是一文銭分だけ飴を買いに来ました。七日目の夜、いつものようにやって来た女の方は「今夜はお金の持ち合わせがありませんが、どうぞ一文銭分だけ飴をめぐんで下さい。」と力なく言いました。可哀相に思った主人は飴を渡しながらも不審に思い、後をつけてみました。

女の方は足音もさせず、暗い道を通り抜け、やがて光源寺の新しい墓地のあたりで消えてしまいました。すると、オギヤー、オギヤー、と赤ん坊の泣き声が聞こえてきました。

主人は光源寺の和尚さんに、今までのことを話しました。和尚さんは、早速、人を呼び集め、墓を掘り起こさせますと、中から赤ん坊が這いだしてきました。三途の川の渡し賃にと棺桶に入れてもらった六文銭で、赤ん坊に食べさせる為の飴を、毎夜、買いにきていたのです。

数日後、飴屋の主人が寝ていると、夢枕に女の方が現れて「私の赤ん坊を助けて下さって有難うございました。お礼をしたいのですが、何か困っていることがありましたら、おっしゃって下さい。」麴屋町が水不足で困っていることを知ると、「明朝、朱い櫛が置いてある所を掘って下さい。」と言って消えてしまいました。

朝になり、飴屋が朱い櫛が落ちている所を掘ると、水がこんこんと湧いて出ました。

この井戸は「飴屋の幽霊井戸」と呼ばれ、水飢饉の時でも涸れることなく、きれいな水をたたえ、町内の人々の暮らしをうるおしました。今は使用されていませんが、井戸跡は今も麴屋町5番1号地先の道路下に残っています。

「飴屋の幽霊」の民話の主人公である幽霊図像は、光源寺に所蔵され、毎年旧暦の7月16日に開帳されていたが、最近では、毎年新暦の8月16日に開帳されている。

その「飴屋の幽霊井戸」について、長崎地誌名勝を記した歴史書を調べると、正徳5年(1715)、長崎君舒(ナガサキ君舒)著の「長崎図誌」や明治26年(1893)、香月薫平著の「長崎地名考」に記載されている泉井部の

26ヶ所程の中で最初に 柳泉(ヤナギノイズミ)が出てくる。

この柳泉の井戸について次の様な説明がある。

「柳泉は麴屋町にありて、水底五尺許り、水清冷にして甘美也、上に柳樹あり因て名とす、元禄年中(1688～1703)江府に貢献する果実の蜜漬を製するに用ひし水也、他の飲用を禁し、常に密封して鎖す」とある。

長崎君舒氏は僧、文人、長崎甚左衛門純景の弟、織部亮為英(オリベノスケタルビ)の四世の孫、田川次郎左衛門の長男、俗姓は田川仲綏である。

井戸祭について

今日の様に水道が発達する前、長崎の井戸は、梅雨が明け真夏に入る前に、市中の井戸は井戸水を浚い上げ、新しい清水に替え、水に感謝を込めて井戸祭(井川まつり)をしたそうだ。

現在ではあまり見かけなくなったが、麴屋町内にある井戸を代表して、柳泉(飴屋の幽霊井戸)では、今でも毎年7月に井戸祭が実施されている。

この井戸祭の様子は、町内の人達が竹箆を切って来て、井戸の廻りに立て、御幣(ゴヘイ)をつけ、「奉鎮請水分神」及び「奉鎮請水汲女神」という幟(ノボリ)を立て、祭壇には御酒、鏡餅、米、塩、黄瓜、白菜、大根、人参、初茄子、枇杷等を供え、伊勢宮神社の神主を迎えて町民達が祈念せしめている。

梅雨明けの頃、水に感謝し、井戸祭を残した昔の人の心を受け継いでいきたいものである。

